

鹿児島県・甕島における「アイランドキャンパス」の取り組み

— 九州情報大学地域情報センターの実践報告 —

Practice Reports of the “Island Campus” Projects in Koshiki Islands by KIIS

平田 毅

Takeshi Hirata

はじめに

九州情報大学では、学術研究所内に2012年に新設された地域情報センターの事業として、開設年度から毎年、鹿児島県薩摩川内市の甕島において「アイランドキャンパス」事業に参加し、現地で交流実践を実施してきた。

本稿は2012年から3カ年にわたるその取り組みの実践報告である。

「アイランドキャンパス」への参加については、2012年および2013年の2回は、甕島が属する薩摩川内市の事業「こしきアイランドキャンパス」に参加する形で実施した。しかし、薩摩川内市の本事業が2013年度を以て休止されたため、2014年度については鹿児島県離島振興協議会の「アイランドキャンパス」事業に参加することによって実施した。

そもそも「アイランドキャンパス」事業そのものは、後者の鹿児島県離島振興協議会の「アイランドキャンパス」事業が先行しており、薩摩川内市はこれを模倣した形で当市独自の「こしきアイランドキャンパス」事業として、2008年度から6ケ年にわたって実施されてきたものである。

アイランドキャンパス事業は、「高等教育機関のない鹿児島県の離島を大学、短大等の学生等を対象とした学外活動の場として提供し、離

島の有する豊かな自然や文化を理解してもらうとともに、地域住民も参加できる公開講座等の開催により、交流人口の拡大やU I ターンの促進を図る」ことを目的としている。事業内容としては、「ア 鹿児島県の離島地域において実施し、離島振興に役立つ次のいずれかのテーマで実施する調査・研究等事業：地域資源を活用した新しい特産品開発の方策について／交流人口の拡大を図るための観光振興の方策について／その他（特に分野を問わない）、イ 事業成果の還元：事業成果を次の方法により、実施した地域に還元するものとする（事業成果報告書・提言書の作成・提出／地域住民を対象としたシンポジウム、ワークショップ等の開催）」と、鹿児島県離島振興協議会の「アイランドキャンパス事業実施要領」に記されている。薩摩川内市の「こしきアイランドキャンパス」事業についてもほぼ同様の目的・事業内容となっている。

私たちは、この二つの自治体の事業に応募する形で、甕島における地域交流実践を継続して実施してきたことになる。

1. 甑島の概要

甑島は、鹿児島県串木野の西方海上約30km、東シナ海に浮かぶ列島である。上甑島、中甑島、下甑島の三島と周辺のいくつかの無人島から成っている。面積117.56km²、海岸線延長は183.3kmである。島には、里村、上甑村、鹿島村、下甑村の4村があったが、2004年に川内市ほかと合併し薩摩川内市の一部（里町、上甑町、鹿島町、下甑町）となった。

全島の人口は5,576人で、戦後直後1950年の24,744人をピークに1970年には半減し、その後も年々減少してきている。産業別人口比は、第一次産業12.3%（水産業10.9%、農業1.3%）、第二次産業19.4%、第三次産業68.1%となっている。第一次産業の比率が日本全体の平均よりも高く、甑島列島は水産業の島と言える。（2010年実施の国勢調査による）

島には高校がない。子ども達は中学を卒業すると島を出る。これを甑島では「島立ち」と呼んでいる。島立ちすると、子ども達の多くが進学し、

就職し、中には島に帰ってくる者もあるが、殆どが島外に住み続けることになる。このことが、島の急激な人口減少、過疎化促進の原因の一つとなっている。

下甑島の西岸は、鹿島断崖に代表される険しい断崖や、「ナポレオン岩」に代表される奇岩・巨岩を擁した男性的な海岸が特徴的である。また、上甑島里のトンボロ（陸繋砂州）や大小3つの池が砂州によって海と隔てられた景勝地「長目の浜」に代表される独特の地形が見られることも特徴である。

夏にはカノコユリが咲き誇り、海面をウミネコが舞い踊る。観光開発の手にさらされて来なかったこともあって、甑島の地形や自然は半ば手つかずのまま、昔ながらの時間の流れと人々の暮らしぶりが色濃く残っている風情がある。

この海域景観と優れた自然環境が評価され、甑島は2015年3月16日に国定公園に指定された。

この島を舞台に、私たちは「アイランドキャンパス」を実施してきたのである。以下、私たちの取り組みを報告していく。

【表1】九州情報大学の「アイランドキャンパス」の概略

年度	実施期間	テーマ	実践内容	実施場所	参加人数	実施形態
2012	9月12日 ～15日	漂着物探しと国際交流・国際理解、そして情報発信！	上甑島散策、漂流物探し 里小学校で交流授業実践 韓国の遊びと歌で国際交流 里公民館での 韓国語講座と韓国料理の提供	上甑島 里小学校 里地区	学生：9名 (うち留学生4名) 教員：2名	薩摩川内市 「こしきアイランドキャンパス」事業に応募・参加
2013	9月26日 ～30日	遊び・歌・料理・言葉を通して国際交流・国際理解、そして情報発信！	長浜小学校で交流授業実践 韓国の遊びと歌で国際交流 給食交流 瀬々野浦地区での交流 韓国語講座 区民運動会への参加 国際交流&韓国料理提供	下甑島	学生：14名 (うち留学生5名) 教員：2名	
2014	9月25日 ～29日	下甑島・瀬々野浦地区との運動会を通じた地域交流（および同地区の体験型観光振興（「ウラおこし」と情報発信の方策）	長浜小学校での交流 全児童との交流（昼休み） 6年生児童との 綱引き・相撲を通して交流 瀬々野浦地区での交流 区民運動会に参加 相撲交流&チャンコ鍋の提供	長浜小学校 瀬々野浦地区	学生：10名 (うち相撲部4名) 卒業生：1名 教員：2名	鹿児島県離島振興協議会 「アイランドキャンパス」事業に応募・参加

2. 「こしきアイランドキャンパス」の取り組みの概要

私たちの甕島での「アイランドキャンパス」事業の3年間の概略は【表1】のようにまとめられる。

「アイランドキャンパス」事業へはじめての参加であった2012年度は、その取り組みの目的を以下のように設定した。

- ・ 本学の留学生（韓国）と里地区の小学生との交流を通して、相互の国際理解を深める。
- ・ 甕島の海岸の漂着物を通して、甕島が広がる海によって世界に繋がっていることを理解する。
- ・ 学生及び留学生が「甕島」と出会うことを通して、甕島という地域（離島）に愛着をもち、日本の離島文化の一端を理解しようとする態度を養う。
- ・ 甕島で出会った人や自然・文化をインターネット等で情報発信していくことを通して、情報を活用する力（発信する力）を身につける。

甕島の海岸線には様々な漂着物が流れ着いている。南海からの貝殻や椰子の実など自然物だけでなく、韓国や中国・台湾などの生活物の漂着も多い。一方、本学は留学生（中国・韓国など）の在籍も多く、日本の離島を訪ねることもなく卒業後帰国する留学生も多い。

2012年度の「こしきアイランドキャンパス」では、甕島への韓国からの漂着物を一つの題材として里小学校の子どもたちと本学の韓国人留学生とを遊びと歌を通して出会う試みを実施してみた。子ども達にとってそのことは、海を介して繋がっている世界（異文化）への理解に向わせる何らかの契機となったと考えている。また、参加した本学留学生にとっても日本の離島文化（人、自然、風俗、生活習慣など）の一端に触れる大きな機会となった。「甕島」体験は、その後の彼らの卒業研究において甕島の民家について調査・研究してみようという動機に繋がっていった。

そして、2年目の2013年度は、目的はほぼ前年を踏襲したものであったが、実施場所を下甕島に

移し、前年の反省と教訓の上に再度国際交流の実践を実施した。瀬々野浦地区でウラおこし事業の一環として考案され地元の食文化を生かした料理「ごちそうさんど」と韓国料理を通して国際交流・国際理解を深めた。また、その瀬々野浦の子ども達に通う長浜小学校において、韓国の遊びや歌を通した国際交流の授業実践を実施した。さらには、2013年3月の瀬々野浦地区の小学校・西山小学校の閉校後、初めての地域のみで実施する運動会に本学学生も参加させていただくことにより、地域ぐるみの交流も実現できた。

私が参加する学生たちに強く求めたことは、大きく次の二つのことであった。

- ・ 甕島を楽しむ ～自然を楽しむ。子どもたちと楽しむ。人を楽しむ。
- ・ 甕島とつながる ～子どもたちとつながる。人とつながる。

また、3年間を通して、本学の“「情報」を学び・研究・活用する”という大学の特性を活かし、甕島における私たちの実践・活動をインターネット等を通して、逐一情報発信していくことも試みた。

そして、3年目となる2014年度の取り組みも、前年に引き続いて、下甕島・瀬々野浦での交流が中心となった。前述したようにこの年から薩摩川内市の「こしきアイランドキャンパス」事業が休止したため、鹿児島県離島振興協議会の「アイランドキャンパス」事業への参加という形に変更し、これまでの取り組みを継承した交流実践を実施することが可能となった。

また、2014年度は韓国人留学生の参加が困難であったため、相撲部学生の参加を得て、本学への関心と理解を深めるという新たな試みとなった。

2014年度の取り組みの目的は以下の通り。

- ・ 学生が「甕島」と出会う（出会い直す）ことを通して、甕島という地域（離島）に愛着をもち、日本の離島文化の一端を理解しようとする態度を養う。
- ・ 学生が西山地区（瀬々野浦）運動会へ参加し、料理提供等を通して交流することにより、相互の親睦を図るとともに交流を深める。また、相撲部の参加により、本学への関心と理解を

高める。

- ・瀬々野浦地区の人々の営みや自然・歴史を実地に学ぶことを通して、地域理解を深めるとともに「ウラおこし」の観光資源を発掘し、体験型観光振興のプラン作成を試みる。
- ・上記、観光資源など瀬々野浦の魅力を効果的に情報発信していくための方策を実践的に試みることを通して、情報を活用する力（発信する力）を身につける。

今回は、実施地域が前年度とほぼ同じであること、そして半数の学生が昨年に引き続いて参加していることから、学生たちには、大きく次の二つのことを求めた。

- ・甕島を楽しむ ～自然を楽しむ。文化を楽しむ。出会い・再会を楽しむ。
- ・甕島とつながる ～多くの人々と出会い、つながりを深める。

これ以降、今年度（2014 年度）の取り組みの実際について、紙面を割いて報告していく。

3. 2014 年度「アイランドキャンパス」の実践内容の詳細 ～その成果と課題

今回の取り組みは、大きく次の4項目である。

- (1) 下甕・瀬々野浦地区の運動会への2年目の参加を通して同地域の住民との交流
- (2) 長浜小学校の子ども達との再会と交流
- (3) 島おこしの一環として取り組まれている壁面づくりのお手伝い
- (4) 情報発信
- (5) アイランドキャンパスでの「学び」を他の学習・研究活動や実践の場面に繋げる

以下、それぞれの項目に沿って、今回の「アイランドキャンパス」での私たちの実践を振り返りながら、総括していく。

(1)瀬々野浦・西山地区における運動会への参加交流と相撲部によるチャンコ鍋の提供

①瀬々野浦・西山地区の運動会に参加

9月28日（日）場所：旧西山小学校

昨年に引き続き瀬々野浦地区の運動会へ参加した。昨年は韓国人留学生とともに参加し、昼食時間に韓国料理を提供することによって交流を行ったが、今年度は本学の相撲部員4名と共に参加することとなった。

この運動会へ昨年から継続して参加2回目となる学生は5名（+教員1名・OG1名）であり、今回が初参加となる学生は5名（+教員1名）であった。

場所は、旧西山小学校体育館。昨年は雨天のため校庭での開催が雨天のため急遽体育館に移動しての開催であったが、今年は当初から体育館での開催が決定していた。それは、地域の人口規模（150人程度）から体育館での開催が可能であること、参加者の纏まりが得やすいこと、高齢者にとっても屋内開催の方が熱中症等の健康面でのリスクが軽減されること、そして校庭での開催が施設管理面で難しいこと、などの理由が挙げられる。

私たちの参加は、その体育館での運動会準備から始まった。

運動会準備 9月27日（土）午後

しばらく使用していない体育館ということもあり、準備作業はまず床掃除はじめとした体育館の清掃作業からはじまった。物品の後片付け・整理、会場内外への万国旗の飾り付け、放送設備の設置、道具の搬入、景品の搬入など、住民のみなさんと協力しながらの準備・設営のお手伝い。

住民の方々の中には、昨年参加した学生を覚えてくださっている方もいて、学生との再会の挨拶を交わしている場面も多くみられた。

昨年に比べて作業も迅速に終わり、あとは明日の開催を待つばかりとなった。私たちは、明日の昼食時に提供する「チャンコ鍋」の準備のため、相撲部のメンバーとともにコミュニティセンターへ移動した。

西山地区の運動会（当日） 9月28日（日）

午前10時、いよいよ体育館で運動会開始。体育館での運動会開催が可能なのは西山地区の人口が150人余りだということもある。多くの住民の方々が続々と参集され、開会式に続き、準備体操、そして競技が始まった。

私たち九州情報大学の参加は2年目ということもあり、何の違和感もなく溶け込んでいるようだった。相撲部メンバーは、全員まわし着用で運動会に参加しアピールした。

私たちはいくつかの競技に参加させていただいた。地域のみなさんの声援が飛び交うなか、相撲部学生がまわし姿で走り抜ける様は爽快ですらあった。拍手や笑い声が体育館の中に響き、学生達もその中で、笑顔あふれた表情で、楽しく競技に参加していた。

午後には、相撲部によるプログラムが用意されていた。まず、相撲部4人によるシコ演技の披露、シコを踏むたびに声援が上がる。続く住民希望者との模擬取り組みは、最も盛り上がった場面となった。我こそはという「つわもの」たちが相撲部に挑んでくださった。

昨年同様、会場が一つとなったハートフルな運動会。今年も、西山地区、甌島がひとつであることを実感した時空間となった。その場に2年間にわたり私たちも「参加している」ことが、この上もない幸せであった。来年・再来年と継続して参加し続けることで、本学学生と西山地区との繋がりをもっと深めていきたいと願った。

②「チャンコ鍋」で交流

9月29日（日）運動会の昼食の時間

場所：旧西山小学校 体育館

運動会の昼休み時間を利用して、相撲部特製の「チャンコ鍋」を参加住民のみなさんに提供し、試食していただいた。コミュニティセンター調理室で前日に下ごしらえをしたものを、当日体育館入り口屋外にテントを設営しそこで仕上げ、提供した。

みなさん、「おいしい」「美味しい」と大変好評であった。何杯もおかわりしてくれる方もおられ私たちも大満足であった。

住民の方からは「昨年の韓国料理よりも私達年寄りにはこちらの方が美味しく食べられる」という声も聞かれた。

チャンコ鍋提供時に実施したアンケートに基づけば、当日の運動会参加者の世代別・地域別構成は【表2】【表3】のようになる。あくまでアン

ケート回答者の集計であるので、実際数との差異はあるものの、およその傾向は読み取れるだろう。

60歳以上の割合が50%（34人）と高い比率を示している。高齢化が進行する地区の実態を反映したものとなっている。また、瀬々野浦地区以外からの参加者の回答も35%（22人）を占めている。これは親戚縁者の参加があることも示しているが、従来、地区外にも開かれた運動会が開催されてきた経緯も関係した数値と見ることもできる。

【表2】世代別参加者数

世代	男	女	総計
小学生	4	5	9
中学生	2	2	4
20歳代		1	1
30歳代	5	2	7
40歳代	1	3	4
50歳代	7		7
60歳代	7	5	12
70歳代	7	9	16
80歳代		2	2
90歳代		2	2
総計	33	31	64

【表3】地区別参加者数

参加地区	人数
瀬々野浦	42
長浜	14
手打	4
鹿島	3
片野浦	1
総計	64

③ 運動会の打ち上げに参加

9月28日（日）16:00～

西山地区コミュニティセンター

昨年に引き続き今年も、運動会の後の「打ち上げ」に参加させていただいた。私たちを含めて40人ほどの参加でなごやかな宴の場がもたれた。

参加された西山地区の方々と学生たちが膝を交えて語り合う。学生たちは昨年より増して打ち解けている印象をもった。卒論テーマのフィールドを甌島や瀬々野浦にしている学生が、参加した地区の方々から聞き取りをしている姿も見られた。お酒も入り、カラオケも入り、和やかに交流は続いていった。世代が異なる人たちが、「アイランドキャンパス」という事業を通して、共に運動会を仲立ちにこうして交流する、この場はすごく有意義な空間だと、昨年に引き続き改めた感じた時間であった。すべてにおいて、西山地区のみなさんに感謝するばかりである。

《瀬々野浦地区での交流の成果と課題》

- (1) 今回の瀬々野浦での2年目の交流実践は、韓国人留学生の参加から相撲部学生に参加にシフトしたことを除いては、昨年を踏襲したものに留まった。瀬々野浦（西山地区）という150人ほどの集落での取り組みであったことが、すべてを成功に導いてくれていると心から思う。昨年から2年目ということもあり、住民の方々が私たちのことを覚えていてくださっていることは、再会を通して繋がりを深めていくことに結びついていくと信じている。2年にわたり、お世話をしてくださった方々をはじめ西山地区のすべてのみなさんに、ただただ感謝するばかりである。
- (2) 相撲部による「チャンコ鍋」での交流については、とても喜んでいただいたと感じている。提供の仕方についても、体育館入り口外で最終的な調理をし、昼休み時間にそこで提供する形をとったが、ほとんど混乱もなくスムーズに提供することができた。また昨年までの韓国料理よりも好評だった印象を受けた。準備した200食（80%大鍋分）すべてが完配するまでにはいかなかったが、何倍もおかわりをする人もいて嬉しい限りであった。
- (3) 打ち上げは、昨年と同様、本当に良き機会と場を設定していただけたと感謝している。5名の参加学生が昨年に続き2回目の参加であったため、昨年に比べより深い交流を果たせたのではないかと考えている。こうした出会いや再会を通じて、異世代とのコミュニケーションは、すべての学生にとってとても有意義な経験となっていると感じている。宴は、カラオケ大会へと展開し、2次会へと広がっていったことは、私達学生と住民の方々との結びつきをさらに深めていくことにつながっていったと確信している。
- (4) しかし、今後の課題もまた明らかになってきていると思う。西山地区での私たちの運動会への参加は、あくまでも「参加させていただいている」という受け身の姿勢であることだ。確かに相撲部を中心とした「チャンコ鍋」の提供などを実施しているが、もっと「大学

生＝学び・研究する主体」としての関わり方を模索し構築していく段階にきているのではないかと考えている。次年度以降の取り組みの中でその具体的な方向を探っていきたい。

(2) 相撲部による長浜小学校での綱引きと相撲による交流

9月26日（金）13:00～16:00

長浜小学校（体育館）

昨年は、長浜小学校に授業時間を割いていただき、留学生による国際交流授業を実践したが、今年は、6年生保護者（PTA）の呼びかけに応える形で、6年生児童との交流が中心の取り組みとなった。その内容は、

- ・薩摩川内市の綱引き大会で優勝した長浜小6年生チームに相撲部が挑むという交流
- ・相撲部による相撲を通じた交流

である。

これらの交流に先立ち、私たちが到着したのが、ちょうど昼休み時間ということもあり、小学校側の配慮で、全校の子ども達と校庭で共に遊ぶことで交流する機会をいただいた。2年目ということもあり、昨年の交流実践を覚えている子や本学学生のことを覚えている子もあり、自然に遊びの輪も広がっていったようだ。

①綱引き対決

長浜小学校の6年生との綱引き対決は、相撲部の連中を驚かせてくれた。そのときの様子を参加した学生は次のようにレポートしている。

「子ども達は薩摩川内市の綱引き大会で優勝しているということもあってかなりの強豪、相撲部が負ける場面もたびたび。顔をゆがめながら必死に綱を引いているまわしを着けた大きな体の相撲部たちの姿に、観戦している私たち、保護者の方や先生たちとともに盛り上がったのでした。子ども達VS相撲部4人の綱引きは辛くも引き分けにやっと持ち込めて相撲部の面子をなんとか保てました。」（九州情報大学地域情報センターFacebookページより）

②相撲で交流

綱引きで悔しい思いをした相撲部学生たち、今度は子ども達と相撲を通しての交流で挽回である。

シコ踏みの演技を披露、シコの踏み方を子ども達にも教えたり、相撲部学生を相手に取り組みをしたり、と楽しい時間を持つことができた。とりわけ、相撲の取り組みは、体育館に集まった保護者の方・先生方の声援で盛り上がったひとときだった。相撲部学生が手加減をして子ども達と対戦していたが、今度は子ども達が懸命にまわし姿の相撲にぶつかっていった姿が印象に残った。

相撲交流の後、6年生の保護者の方々から私たちと子ども達に対して、かき氷のもてなしを受けた。場所を家庭科室に移し、家庭より持ち寄せられた手回しのかき氷器で作っていただいたかき氷は、フルーツもたくさん載っていて甘さと冷やっこさが、気持ちよく私たちの心に沁み込んだ。かき氷を食べながらのおしゃべりもまた、楽しい交流の場となった。

《長浜小学校での実践の成果と課題》

今年は、昨年の小学校と連携した取り組みではなく、長浜小6年生の保護者（PTA）の方々と連携した取り組みであった。小学校と連携しての継続した交流が実現しなかった理由としては、薩摩川内市の事業休止の煽りを受けて今年度の参加体制の決定が遅れたことが挙げられる。

昨年よりも交流規模の縮小があったとはいえ、充実した相撲部・本学学生との交流が実現したことは評価されるべきことであり、保護者の方々をはじめ、臨機応変に対応してくださった小学校に感謝するばかりである。

次年度以降は、他地区の小学校での交流も視野に入れ、交流授業の実践を実現していきたい。取り組みの広がりや深まりを模索していきたいと考えている。

(3) 壁画づくりのお手伝い

9月26日（金）午前中 西山から手打ちに向かう車道の三叉路

地域おこし協力隊の小泉さんの呼びかけもあり、私たちは車道の側面に壁画づくりのお手伝いも行った。この取り組みについて、学生たちは次のようにレポートしている。

「瀬々野浦から手打ちに向かう途中（車道）の三叉路の路側壁画づくりのお手伝い。この三叉路は道路標示もなく道に迷いやすいため、道案内も兼ねて瀬々野浦の子ども達らを中心に壁画づくりが進行中の場所です。

そのお手伝いとして、私たちも壁画の色塗りや製作を実施しました。私はカメの色塗りをしました。が、何しろ絵のセンスがなかったもので、仲間とワイワイ相談しながら、なんとか描き上げました。いい作品に出来上がったと思います。相撲部のメンバーも、道路の壁面にペンキで絵を描くなんて経験ははじめてなので、ワイワイと楽しく取り組んでいました。」

この取り組みに対して、私たちはやはり受動的な参加に留まった。既に地域の有志によって進行している壁画づくりのほんの一端を担ったに過ぎない。ただ、この取り組みを通して、地域おこし協力隊の方々が地元地域と連携・協力して取り組んでいることの実際に学生達が出会ったことは大きな意味があったと感じている。学生のなかには、自らの卒業研究のテーマを深めるために、地域おこし協力隊の方との交流の中からさまざまな示唆を得ている者もいることは評価すべき点である。

(4) 情報発信

今回の「アイランドキャンパス」では、情報発信をFacebookページに限定して実施した。

※「九州情報大学地域情報センター」Facebookページ <https://www.facebook.com/kiis.ai.center>

発信内容は、以下の項目であった。

- ・交流の様子レポート
- ・大学生が出会った“甕島”レポート

情報を専門に学ぶ本学の特性を活かして、私たちの活動や甕島での発見を、インターネットを通して発信していくことは重要なことである。しかし、毎回十分にそれを実践できていないのが実

状である。

Facebookページでの情報発信は、基本的に学生たちによる分担で、彼らがコンテンツを作成し発信作業を実践した。担当者は、毎晩遅くまで掲載写真を選定し文章を書き、情報コンテンツを作る。このコンテンツを有効かつ迅速に構成する力が弱い。これは彼らに文章表現能力が十分に身につけさせきれていないことに起因する、今後の大きな課題の一つである。

(5)「甕島」の体験を、他の学習・研究活動へとつなぐ取り組み

学生たちが、甕島での「アイランドキャンパス」の体験を大学生活における他の活動と繋げていくことは大切なことである。「アイランドキャンパス」をその場かぎりの実践にとどめず、それを軸に、大学での他の活動・学習領域に繋げ広げていく取り組みを目指すことも、私たちは実施してきた。

- ①「アイランドキャンパス」実施前の事前学習・事前調査
- ② 学園祭での「甕島フェア」の開催
- ③ 学園祭での「アイランドキャンパス」報告会の開催
- ④ 卒業研究のテーマに甕島をフィールドとする取り組み

これらの項目に取り組んで行くことを通して、「アイランドキャンパス」での体験を支点とした総合的な学習・研究・実践の場を創出することを目指している。そのことは、学生たちにとってより大きな経験へと繋がっていくものであり、そこから学び、自らの成長にも繋げてほしいとのねらい・ねがいもある。

① 事前学習・事前調査の取り組み

「アイランドキャンパス」の実施地・甕島についての事前学習は重要である。今年の参加者は昨年から継続参加の学生も多く、既に甕島について情報・知識を持っていた。今年からはじめて参加する学生は、はじめて「甕島」と出会うべく、

春休み時期を利用して甕島に上陸する事前調査を実施した。まず、甕島の風と光と人に出会うことから始めた。

4月以降は、これまでの本学の「アイランドキャンパス」の報告書や甕島関連の文献なども参照しながら、甕島についての知識を深める学習も行った。また、今年度の計画立案を練る過程と並行して、現地との打ち合わせも兼ねて再度中心メンバーが甕島を訪れるという事前調査も実施した。

実際の事前調査の実施は、以下の通りである。

- ・3月1日～3日：第1回事前調査（下見） 下甕島・下甕町（現3年生3名・現3年生1名+担当教員）
- ・3月21日：「甕島地域振興シンポジウム」へ参加〔於：薩摩川内市国際交流センター〕（現4年生1名+担当教員）
- ・6月21日～24日：第2回事前調査（下見） 上甕島&下甕島瀬々野浦+薩摩川内市（担当教員）
- ・8月19日～20日：第3回事前調査 瀬々野浦地区・運動会参加の打ち合わせ（4年生3名+担当教員）

これら事前の取り組みを通して、「アイランドキャンパス」の実施に当たって、ただ単に「参加する」対象としてではなく、自ら積極的に取り組む「参画主体」としての姿勢を身に付けて欲しいとの願いがあった。しかし、現実はなかなか思惑通りには進まないのが現状であり、今後の大きな課題である。それでも、学生たちにとっては、甕島は特別に意味づけられた場所（対象）となっていたことは確かであろう。

② 学園祭での「甕島フェア」の取り組み

「アイランドキャンパス」の中核を担った平田ゼミの学生を中心として、11月8日・9日に開催された本学の学園祭において、模擬店の一つとして「甕島フェア」を企画し出店した。この取り組みは、昨年に引き続いて2年目の試みである。

一昨年来、私たちが出会ってきた甕島のおいしいものを販売し、来場・来店される多くの人たちに甕島について知ってもらおう、というのが趣旨である。

昨年の取り組みの成果と教訓を踏まえて、今回の取り組みはさらにグレードアップしたものとして進められた。販売した品は11品目、イートイン形式で3品目の販売も行った。これは昨年度より

品目・数量ともかなりの増大、仕入総額24万円にも及んだ。

また、下甕手打の「こしき海洋深層水」の協力も得て、試飲用のサンプルを提供していただき、来訪者に紹介することも出来た。さらには薩摩川内市観光・シティセールス課の協力で、薩摩川内市および甕島のパンフレット等のご提供もいただいた。これらのみなさんに感謝である。

こうして、「甕島を知ってもらう」ためのアイテムも昨年よりも充実させ、今年の「甕島フェア」は開催された。

ご来店いただいたお客さんの評判もよく、イーフトイン商品はどれも美味しいと好評であった。学生たちも積極的に甕島について知っていただこうと語りかけていた。

今回の取り組みは、昨年よりも学生たちが、主体的・積極的に取り組んだのが大きな成果である。販売商品の事前予約として、精力的に大学周辺地域に個別訪問し売り込みに行く姿もあった。それらの取り組みが、幾ばくかの利益にも結びついていった。

この取り組みは、「アイランドキャンパス」への参加のひとつの成果でもあり、それをテコにした学生たちによる自主活動として広がりの実践として、今後とも継続して発展させていければと考えている。

③ 学園祭での報告会の開催

「甕島フェア」の開催と並行して学内の教室において、私たちの「アイランドキャンパス」の報告会も開催した。これも昨年から継続した取り組みである。内容は以下の通りである。

1. 甕島の概要
2. 「アイランドキャンパス」とは
3. 昨年までの「アイランドキャンパス」の取り組み
4. 今年の「アイランドキャンパス」の実践報告
5. 4年生の卒業研究テーマの紹介
6. 「甕島フェア」の紹介

参加者はさほど多くはなかったものの、参加された皆さん・先生方から、質問や意見も活発に出

され、「甕島」をフィールドに卒業研究をしている4年生にとっても示唆に富む意見も聞くことができ、有意義な時間となった。

本学の「アイランドキャンパス」事業への取り組みとしては、卒業によって入れ替わっていく学生たちをどのように繋いで持続可能で発展的なものとして、いかに継承・継続していくのかが、これからの大きな課題となるだろうことを実感した場ともなった。

発表した平田ゼミの学生達は、11月末の滋賀県彦根の聖泉大学との合同ゼミ（こちらから実施している）の場でも、この報告会の発表内容も含めてプレゼンテーションを行った。

④ 甕島を卒業研究のテーマにする取り組み

「アイランドキャンパス」の中心主体であったゼミ学生は基本的に甕島をフィールドとした卒業研究テーマを設定し取り組んでいる。

・甕島の「地域おこし」についての研究

～古道再生プロジェクトを中心に～

・下甕島瀬々野浦・西山地区のコミュニティ組織の研究～瀬々野浦の民家と集落形態～

それぞれかなり呻吟しながら研究活動を進めてきたのが実際に、学生個々人により進捗状況もばらつきがあった。しかし、それぞれが甕島から学んだことを懸命にまとめようとしてきたことは確かであるし、客観的な評価のほどはともかく、主観的には意味ある卒業研究としての成果物を完成させたことは大きな意味があったと考えている。

この卒業研究へ繋げる試みは、本来最も重視させるべきことがらであると考えている。しかしながら、指導する側にも力不足もあり、学生たちに的確な方向づけやサポートが出来てないことは否めない。これまで、交流体験を中心に据えてきた甕島での「アイランドキャンパス」の活動を、学術的なフィールドでの取り組みへと止揚していく体系的なデザインが要請されていると痛感している。

4. 「アイランドキャンパス」取り組みの総括

ここでは、各年次で作成した「報告書」の「おわりに」で私が書いた文章を転載することで、3年間にわたる私たちの「アイランドキャンパス」の取り組みの中間総括としたい。

(1) 2012 年度総括

「こしきアイランドキャンパス」事業へのはじめての参加であったが、きわめて有意義なものであったと確信している。

ただ、私たちの今回の実施内容が、本事業の趣旨に合致し妥当なものであったのかどうかは薩摩川内市および甕島の人々の評価に委ねるしかない。

今回の九州情報大学の関わりは、今年度から本学学術研究所内に新設された地域情報センターの事業の一環としての参加という体裁をとっている。新しいセクションとしていったい何が出来たのかと模索していた折に薩摩川内市の「こしきアイランドキャンパス」事業の募集案内が目にとまり、まずはここからスタートしてみるかということになった。

では、何をすればいいのか？ 甕島？と言っても「何も知らない」というのが私たちの、私の実態であった。まずは担当教員の私が甕島を訪れるところから始めるしかなかった。その折、現地でお世話をしてくださった齊藤純子さんとそのご家族の方々には、さまざまな示唆をいただいた。なにより、そこでの出会いと甕島体験が、今回の

「こしきアイランドキャンパス」での本学の実施内容の骨格を決定づけたと言ってよい。

今回の本学の試みは、学術的なものというよりも実践的な内容で構成されることになった。それは、「甕島」と本学の学生（留学生）たちとを出会わせたいという、私の欲求から出発している。

「甕島」の自然や町並みやそこに暮らす人々との出会いは、彼ら学生にきつとなにものかをもたらすのではないかという淡くしかし強い願いがあった。確かに学生達は、単に「甕島」という鹿児島県の島を認知したというレベルを超えて、「甕島」

に感動し、「甕島」が特別な場所、好きになって帰って来た。

その意味では、今回の「こしきアイランドキャンパス」への私たちの参加は成功であったと言えるだろう。

しかし、同時に課題も見えてきた。そのいくつかはこの報告書の本文中でも言及してきた。もっとも欠落していた部分は、学生たちの「体験」がきつともたらすだろう“なにものか”に重点を置いた”予定調和的な目論見の曖昧さ脆弱さであったと反省している。そのことが本報告書のまとめの段階で露呈してくることとなった。（本報告書の作成が滞らざるをえなかったのはきつとここに起因するのだろう。）

学生達はさまざまな場面でそれぞれの役割に一生懸命に取り組んでくれた。そのことが彼らの充足感や達成感をもたらしてくれた。しかし、そのことを対象化し言語化するその手立てを彼らに十分に準備だて（指導）することを私自身が怠っていたと感じている。

次年度以降「こしきアイランドキャンパス」への参加にあたっては、実践した内容と成果と課題が「見える」（対象化できる）仕組みをあらかじめ体系的に用意していくことが必要であると痛感している。

しかし、それであつてもなお、「こしきアイランドキャンパス」事業へのはじめての参加は、本学にとつても、学生にとつても、そして私自身にとつても、きわめて有意義なものであったと確信している。

(2) 2013 年度総括

「こしきアイランドキャンパス」事業への参加は昨年度に続いて2度目となる。今回もきわめて有意義なものであったと確信している。それもこれも昨年度の上甕・里での取り組みがなければ成り立たなかった。

昨年度は、初めての参加ということもあり、私たちの実施内容が趣旨に合致し妥当なものなのだろうかとの不安も大きかった。また、学生達もすべて初めての参加で、試行錯誤・右往左往の感

が否めなかった。しかし、昨年の取り組みを通して私たちの取り組みの方向性もある程度定まってきたし、「アイランドキャンパス」の事前・事後の取り組みも昨年までの反省を踏まえて計画性をもって遂行できた。また何より、昨年の「アイランドキャンパス」を経験した学生2名が今年も参加してくれたことが大きかったと思う。

今回の本学の試みも、学術的なものというよりも実践的な内容で構成されることになった。それは、「甕島」と本学の学生（留学生）たちとを出会わせたいという、昨年来の私の欲求から出発している。昨年までは予定調和的で淡いまだだった学生達への期待——それは、「甕島」の自然や町並みやそこに暮らす人々との出会いは、きっと学生達になにものかをもたらすのではないかという淡い期待——も、昨年の取り組みを経て今年はその期待も一つの確信めいたものに変化してきた。学生達は、単に「甕島」という鹿児島県の島を認知したというレベルをはるかに超えて、「甕島」での感動や出会いを、その時だけで終わらせずに、自らの卒業研究や学園祭の取り組みに繋げようとしている。「甕島」が特別な場所、好きというだけでなく、自らの成長の糧に転換させようとしているのだ。

その意味でも、今年も「こしきアイランドキャンパス」に参加したことは成功であった。

学生達はさまざまな場面でそれぞれの役割に一生懸命に取り組んでくれた。そのことが彼らの充足感や達成感をもたらしてくれた。その多くは、島の人たちとの出会い、仲間との出会い直し、つまり、〈出会い〉こそが、学生達にそれらをもたらしてくれたと確信している。

〈出会い〉——ここにこそ私たちが「こしきアイランドキャンパス」で求めていることの本質的なものがあるのではないかと思う。コミュニケーション能力がないと言われる最近の若者たち。そこにはこうした出会い・語り合う場が奪われつづけている現代社会の歪みがある。しかし、甕島には、少なくとも私たちが出会ってきた甕島には、そうした歪みはない。真っ直ぐに向き合えば真っ直ぐに返してくれる子ども達や人々に出会うこと

が出来る。私たちが出会おうとすれば出会えるのである。このことの意味は大きい。

幸せや喜びをストレートに感受し表出できる場が無事なまでに存在する島、その島を舞台に今後私たちに何が出来なのか、何をすべきか、楽しい模索の日々はまだまだ続く。

2年にわたって私たちの取り組みを支えてくださった甕島のみなさん、本当にありがとうございました。まだまだこれからも、よろしくお願いいたします。

(3) 2014 年度総括

鹿児島県薩摩川内市・甕島での「アイランドキャンパス」事業への参加は今回で3年目となる。昨年度までの2年間は薩摩川内市の「こしきアイランドキャンパス」事業への参加という形で実施してきた。しかし、薩摩川内市がその事業を今年度から休止したことを受けて、当初学内予算のみでの実施で計画立案を進めていた。そうした折、鹿児島県でも「アイランドキャンパス」事業を実施していることが判明し、急遽その助成に申し込むこととなった。その選定結果が本学に届いたのが8月18日、私たちは晴れて鹿児島県離島振興協議会のアイランドキャンパス事業に参加する形で今年度の「アイランドキャンパス」を実施できることになった。

そうした経緯もあり、今年度の甕島での私たちの取り組みは、当初縮小モードでの計画策定を余儀なくされていた。つまり、瀬々野浦地区での運動会への継続参加のみに重点を置き、それ以外の交流実践を保留した形で立案したため、計画内容そのものが不安定なものとなっていたといえる。また、鹿児島県離島振興協議会「アイランドキャンパス」事業に選定されるべく、これまでの交流実践的な取り組みにだけではなく学術的な要素を加味しようとするあまり、取り組みの軸が曖昧になってしまったことは否めない。本来、「アイランドキャンパス」事業の趣旨は大学という高等教育機関ならではの学生たちによる学術的調査研究を通して、現地の人々と交流し、島の定在に新た

な価値づけを行い、その価値（魅力）を発信していくことに主眼がおかれていると理解している。この学術的な調査研究的な要素は、今回学生たちの卒業研究に結びつけるという試みで多少なりとも達成しようと試みたが、まだまだ客観的に評価されるような水準に至っていないのが現実である。このことは、次年度以降積年の課題となっていくことは免れないと自覚している。

よって、今年度の取り組みも、昨年度までの取り組みを継承し、学術的なものというよりも実践的な内容を中心に構成されることとなった。交流を中心とした実践を中核に据える取り組みは、一ともすれば「学生を甕島で遊ばせているだけ」という誹りを受けないでもないが一、しかしそれは、「甕島」と本学の学生たちとを出会わせたいという、一昨年来の私の願いから出発している。しかも、今回は昨年の「アイランドキャンパス」を経験した学生が参加学生の半数の6名（うち1名は卒業生）もいたことは、彼らが、「甕島」と、「瀬々野浦」と、「長浜小」と、どのような再会を果たし、その関係を彼らなりに如何に深化させてくれるのか、ということが今回の最大の課題とであった。しかし、2回目の参加となると、緊張感も薄れ「馴れ（狎れ）」が出てくる。この「馴れ（狎れ）」を「熟れ」にどのように転化していくか、私たちが試される場面でもあった。（このことは、学生のみに限らず、私自身にも当てはまることである）

今回は、初っ端からトラブルがあった。エンジントラブルによるフェリーの欠航である。私は、学生達だけで島に渡らせた。そのことが、結果的には彼らの自主性や団結力、さらには主体性を多少なりとも発揮する結果となったことは、正に怪我の功名であった。確かにそれは、そのために数多くの下甕島の方々に多大なご助力とサポートがあったればこそその成果であり、現地の方々に感謝するばかりである。結局、私たち教員は翌日の午後には下甕真に上陸を果たし、長浜小学校で学生達と合流することができた。しかし、20時間足らずという短い時間であったが、教員に依存できない状況なかで自分たちだけで計画を遂行していっ

た事實は、彼らに自立（自律）的な何物かをもたらしたように思う。もう少し教員不在が続いたならば、もっと彼らの変容が期待できたのではないかと、今振り返えると考えないでもない。私たちの「アイランドキャンパス」の将来像の一端がここにあると考えている。

昨年度の報告書のなかで、私は次のように書いた。

今回の本学の試みも、学術的なものというよりも実践的な内容で構成されることになった。それは、「甕島」と本学の学生たちとを出会わせたいという、昨年来の私の願いから出発している。昨年までは予定調和的で淡いまだだった学生達への期待——それは、「甕島」の自然や町並みやそこに暮らす人々との出会いは、きっと学生達になにものかをもたらすのではないかと淡い期待——も、昨年の取り組みを経て今年はそれも一つの確信めいたものに変化してきた。学生達は、単に「甕島」という鹿児島県の島を認知したというレベルをはるかに超えて、「甕島」での感動や出会いをその時だけで終わらせずに、自らの卒業研究や学園祭の取り組みに繋げようとしている。「甕島」が単に“好き”というに留まらず、特別な場所＝大学生活におけるひとつの原風景として、学生達は、自らの成長の糧に転換させようとしているのだ。

この気持ちや考えは今も基本的には何ら変わっていない。ここにこそ、「こしきアイランドキャンパス」の成否を決める要があるとも考えている。

そして今年、参加学生の半数は二度目の瀬々野浦での「アイランドキャンパス」であった。昨年、4年生ではじめて「アイランドキャンパス」で下甕島を体験し、今年もOGとして参加したひとりの卒業生は、昨年の甕島で仄かな光を見出し、今年その光に向かっての道筋を確かなものにしている。そこには、彼女自身の変化があり、変容があり、進化がある。それをもたらしたものは甕島でのいくつかの〈出会い〉であり、そして今回の〈再会〉である。具体的な“ひと”との繋がりが人間を成長させてくれている。〈再会〉——ここに今回私たちの「アイランドキャンパス」で求め

ていることの本質的なものがあるのではないかと考えている。

他の学生達もさまざまな場面でそれぞれ取り組んでくれた。それはきっと彼らに達成感や充足感をももたらしてくれた。その多くは、島の人たちとの出会いと再会があつてのことである。そして、仲間と共にプロジェクトを達成するという具体的な行為が、学生達に自らの成長へと導いてくれていると確信している。

今年、私たちの「アイランドキャンパス」は3年目を終えた。前述したように、これまでは交流実践を中心に、「交流」（出会い・再会・体験）に重きを置いた取り組みであつた。3年間の取り組みをとりあえず終えたいま、私たちはその取り組みを“《交流》のその先へ”と前進させる時期にきているのではないかと考えている。

この島を舞台に今後、私たちに何が出来るのか、何をすべきか、いったい何がしたいのか、それらを模索する日々はこれからも続く。

今年も、そして3年にわたって、私たちの取り組みを支えてくださった甕島のみなさん、本当にありがとうございました。まだまだこれからも、よろしくお願いいたします。

おわりに

以上が、私たちの甕島における「アイランドキャンパス」の記録とまとめである。詳細は、各年度ごとにまとめた「報告書」をご参照いただきたい。報告書には、実践の様子が見える写真もふんだんに掲載している。また、参加していただいた子ども達や住民の方々の感想等も掲載している。

前述の2014年度の総括でも述べたように、本学の甕島での実践も3年目を終え、その内容・方法ともに一つの転換期を迎えていると感じている。ただそれは、3年連続で甕島をフィールドにして実践してきたからこそ明らかになってきた課題であり、継続することそのものを否定するものではない。

次年度以降もこれまでの取り組みの成果と教訓

を活かし、学生たちとともに試行錯誤と呻吟を繰り返しながら、新たな活動を含めて創出して行ければと考えている。

そのことは、「高等教育機関のない鹿児島県の離島を大学、短大等の学生等を対象とした学外活の場として提供し、離島の有する豊かな自然や文化を理解してもらうとともに、地域住民も参加できる公開講座等の開催により、交流人口の拡大やU I ターンの促進を図る」ことに繋がって行くと信じている。